

昭和初期の古典籍移動史

——反町茂雄『一古書肆の思い出1 修業時代』を読む——

西 田 毅

古書肆弘文莊主人反町茂雄の名前は、「弘文莊待賣古書目」の出版を通して、一部の研究者や古書籍の専門家、愛好者の世界では夙に知られた存在である。とくに、昭和三〇年代から五〇年代にかけて刊行された「弘文莊善本目録」、「古活字目録」、「名家真蹟目録」、「古文書目録」、「古版本目録」、「弘文莊敬愛書図録」等は、わが国はいまでもなく欧米先進諸国の一流古書肆が発行するものとくらべて何ら遜色のないすぐれた目録として定評ある出版物である。

約六〇年にわたる氏の古典籍の渉猟は第二次大戦後は遠く欧米諸国にまで及び、彼の地の著名な古書肆や図書館所蔵の文献資料の調査が精力的におし進められた。私事にわたって恐縮であるが、今からちょうど十年前、筆者が在外研究でイギリスに滞在中にケンブリッジ大学のニューライブラリーで、幕末期の

日本に駐在したイギリスの外交官W・G・アストンのコレクションの調査を試みたことがある（拙稿「一九世紀日英文化交流史の一齣——W・G・アストンについての覚書」『社会科学の方法』一一巻八号、お茶の水書房参照）。そのとき、同大学のライブラリアンから、かつて反町氏がケンブリッジを訪ねてコレクションの目録作りに励んだことをきかされた。筆者が反町茂雄の名前を知ったのはその時以来のことである。その後、この件で氏とコンタクトをとって事実を確認したこともなく、また、氏によって調査されたというアストンコレクションの目録が印行されたのかどうかも未だ寡聞にして知らない。

このようなさやかな過去の経緯もあって、反町茂雄の存在が気にかかりながら、特別にどうということもなく無為に打ち過していたところ、今回、自伝的回顧談『一古書肆の思い出

I 「修業時代」が上梓されることになり、早速一読におよんだ次第である。

一 「書書周游」——一誠堂に入るまで

全四巻からなる大部の自叙伝の第一巻目にあたる本書は、「修業時代」と銘うたれ、著者の明治三〇年代の「生いたちの記」にはじまり、「一誠堂勤務時代」を経て一九三三（昭和八）年、弘文荘創業のころまでの青年時代の記録である。本書の構成はI 生いたちの記、II 一誠堂勤務時代、III 弘文荘創業のころの三部から成り、第二部の一誠堂勤務時代が全体の三分の二のページ数を占めている。本書のタイトル「修業時代」の由来もそこにあると思われる。

一九〇一（明治三四）年に新潟県長岡の豊かな米穀商の家に生まれ育った著者は幼少年期から無類の本好きであったという。はじめて出会った本が小学校二年生のときに読んだ博文館発行の巖谷小波の『世界お伽噺』であった。小学校三年のときに上京し日本橋蠣殻町に引越してきた著者が近くの本屋で手に入れた本が『アラビアンナイト』。寝食を惜しんで読みふけた。小学校四年生のときに長兄の本棚から夏目漱石の著作をみつけたし、『坊っちゃん』、『草枕』などを読んだ。そしてこれが反町氏の生涯で「本らしい本を読んだ最初」の体験だとい

う。次第に芽生えてくる本格的な読書嗜好を満たしてくれる場は、当時、東京の下町に数多くあった貸本屋であった。著者はもっぱら講談本に熱中したらしい。塚原卜伝や岩見重太郎、黒田騒動や伊達騒動といった御家騒動もの、さらに鍋島の猫騒動そして「太閤記」、「真田三代記」などを借り出して読み耽る。こうした講談本を読むことによって後の読書生活の基礎が養われたと述懐している。講談の内容は大部分が日本の歴史に関係するものであり、こうした日本の史談に親しむうちに自然に柔軟な頭脳に史癖が植えつけられた。事実、一誠堂勤務時代の叙述にもみられるように、のちの古書の調査発掘の仕事にこのような幼少年期の読書体験が立派に功を奏するのであった。さらに、明治末から大正期にかけて流行した立川文庫も当然のことながら少年期の氏の読書目録にあげられている。なお、余談であるが、小伝馬町の小学校で同級生であった田村伝吉、後年の名優阪東妻三郎のことが興味深いエピソードをおりまぜながら語られている。

さて、小学校を終えた氏は日大付属中学から一年浪人して二高に入学、さらに一九二四（大正一三）年には東大法学部へと進学する。小学校時代に芽生えた読書嗜好は、中学・高等学校時代になって次第に本格的なものになり、それが多彩な読書遍歴へとつながってゆく。すなわち、矢野竜溪の『浮城物語』と

偶然に出会ったのがきっかけで、さらに矢野の政治小説『経国美談』へと読み進む。徳富蘆花のいくつかの西洋史伝ものや『思ひ出の記』にも接した。徳富蘇峰の著述を系統的に読むようになったのも中学時代のことである。蘇峰への関心も高山樗牛や大町桂月への関心と同じく思想内容よりはむしろ四六駢儷体風の文章、「漢文くずしの美文」調に魅せられたのが主たる動機であったという。すなわち、蘇峰の明治二〇年代前半から大正初頭にかけて発表された評論集の「国民叢書」を二〇冊以上も読んで、『大正の青年と帝国の前途』、『吉田松陰』、『杜甫と弥耳頓』など蘇峰の壮年期の代表作にも熱心に眼を通した。民友社系の著述家では他に山路愛山や竹越三又の名前があげられているが、中学時代はとくに愛山の史論に傾倒し、主な著書は殆ど全部、神田の古書街で買い集めた。このように氏の初期の読書目録に占める民友社の比重が高いことに注目したい。

他には、三宅雪嶺、大町桂月、高山樗牛などの作品が愛読書にリストアップされている。西洋史方面では、中学の西洋史の担当者であった今井登志喜（のちの東大教授）の影響もあって、箕作元八の著述を片端から読破した。

二高時代の読書の傾向は中学時代の「歴史趣味」から次第に哲学や思想方面に移り、岩波の哲学叢書を買って求めて、西田幾多郎の『善の研究』や阿部次郎、土田杏村、厨川白村らに熱中

する。社会思想の方面では、福田徳三、河上肇、小泉信三、長谷川如是閑、大杉栄らのもののほば全著作を買って集めたという。文学や芸術方面では、賀川豊彦の『死線を越えて』、麻生久の『濁流に泳ぐ』、倉田百三の『出家とその弟子』、西田天香の『懺悔の生活』、鷗外の『即興詩人』、他に柳宗悦、吉井勇、水上瀧太郎ら、そして日本史では、三浦周行、内田銀蔵のもの、洋書では丸善でエブリマンズライブラリーやレクラム文庫の名著をあさった。当時、丸善に到着したばかりの『資本論』の英訳本四冊を買って求めたのもこの頃のことであった。他に英書でJ・B・バリーの『進化思想史』やマクス・ベーアーの『英国社会主義史』等にもひかれている。現代の学生とはくらべものにならない読書量をこなしたといわれる旧制高等学校の生徒のなかでも、このような氏の百科全書的な「書書周游」は、そのころにあってもやはり抜群の読書量というべきであろう。

一九二四（大正一三）年に大学の法学部に進むが、官吏や法律家になる意思は全くなき、政治学科を選ぶ。当時は第一次世界大戦後の社会主義ないし共産主義的風潮が強く、国内はまさに大正デモクラシーの全盛期であり、そうした時代の進歩的な精神状況の感化を受けて、フェビアン協会の政治思想やH・J・ラスキ、ラムゼー・マクドナルドなどの著述やパンフレッ

トに傾倒する。時あたかもイギリスにおいて史上初のマクドナルドを首班とする労働党内閣が成立したことも作用して、労働党の発行するパンフレット類を積極的に集めたり、ウイリアム・モリスやジョン・ラスキン、P・A・クロポトキンらの作品にも感動する。

大学の勉強では美濃部達吉、吉野作造、穂積重遠、大内兵衛らの講義に熱心に出席している。そして吉野の影響をうけて、新人会にも加盟した。しかし、共産主義的思惟傾向はどうしても肌にあわなかったと述べている。当時、左翼陣営を風靡した福本イズムについてはその文体にひかれて福本和夫の著述に親しんだという。こうして大正デモクラシーの風潮の中で青年時代を過した氏は進歩的な思想を身につけてゆくのであるが、氏の言葉を用いていうならば、「読む事には勇敢」だが「実践には臆病」な学生であった。なお、学生時代の趣味に歌舞伎や新国劇などの芝居見物があり、したがって、その方面の黙阿弥や鶴屋南北、坪内逍遙の史劇、岡本綺堂、真山青果、小山内薫らの戯曲集も蒐集した。

この時期の氏の読書生活で注目すべき現象は、新しく維新史や明治史に関する書物を系統的に読みはじめたことである。先に名前をあげた蘇峰の『近世日本国民史』や竹越三叉の『二千年史』など民友社系の史論に傾倒したり、吉野作造を中心

とした明治文化研究会の仕事に対する関心、そして尾佐竹猛、藤井甚太郎、宮武外骨、木村毅らの本、さらに福地源一郎、吉田東伍らの著述も広く渉猟した。

氏のこのような読書傾向の社会的背景として、われわれは関東大震災後、急激に明治文化の研究熱が高まってきたという動向を無視してはならない。さらに、この時期に、明治時代の事物を省察し研究する機運と古書即売展の頻繁な開催がちょうど一つに重なったということは、単なる偶然ではなく、「劫火の中に多くの古文化財を焼亡させた」大震災がもたらした必然的な文化的異変とでもいうべきものであろう。

古書好きでもあった著者は、学生時代に古書即売展がよく開催された本郷や牛込などの古本屋まわりを足繁くおこなう習慣を身につけており、何軒か馴染みの本屋もできていた。やがて、大学を卒業するころになって、実兄の勧めもあって本気で出版業を将来の仕事として考えるようになったのである。

一九二七(昭和二)年春に大学を卒業した著者は、多くの東大卒業生が当然のコースとして進む役人や法曹界へは眼もくれずに、神田神保町の一誠堂に小僧奉公同様の住込み店員として入社した。そのころ「帝大」卒業生ならば七五円ないし八〇円の初任給が相場であるのに、氏は給料については雇う方も雇われる方も双方が一切不問不答、勤務時間は無制限、実際は朝

の八時から夜一時ないし一二時まで勤務、休暇は一ヶ月に一度、という現在の常識では到底考えられない、今ならさしずめ労働基準法違反の条件で実務の見習い修業の生活に入ったのである。ちなみに、「めくら縞の着物に、紺の前垂れ、木綿の角帯をギューと締め」た装束が氏の制服で、その変り種ぶりは、のちに『帝国大学新聞』に写真入りで紹介されたという。

二 一誠堂入社

一誠堂は神保町界限では店舗面積も広くて従業員も一番多い店で、一九二五（大正一四）年に大冊の「一誠堂古書籍目録」（A五版八五〇ページ）を出版して関係者を驚かしていた。

主人の酒井宇吉（先代）は、反町氏と同郷の新潟県長岡の出身で性格は潤達で「寛容な人使いの上手」な人であったという。全部で一〇人程いた住込み店員たちもみな善意の人たちで店は暖かい雰囲気につつまれていた。唯一人の大学卒の学歴をもつ氏も入店早々の仕事は他の店員同様、一日中立ちっぱなしの店番からはじまった。実務の見習いは店番の他に商品の書物の運搬に必要な自転車乗りの練習や地方に発送する本の包装・木箱詰め、それに本務ともいべき古本の相場を覚える仕事など雑多であった。とくに、普通の古本ではなく絶版本の売価をつけることは並大抵の腕前では不可能で、単なる推定や勘では決め

られない。氏は絶版本の相場を夢中で学びとったという。そうした古本の勉強に際して、それまでの豊富な読書体験、多方面にわたる百科全書的知識が大いに役立ち、本のタイトルや著者名、経歴等の理解が意外に速かった。そして、当時の店員たちの憧れの的である古書のセリ市場にはじめて出席することによって、一転機を迎えるのであった。

神田駿河台下の古書市場は全国の古書業界の中心市場といわれるところであった。一流の古本屋の当主たちが集まって、値を競い品物を争う場であり、日本全国の古書相場がここで決定されるといわれる程の権威ある場であった。そこへ入店してわずか四、五ヶ月の新参者の氏が主人の格別の配慮で出入りすることが許されたのである。

古書のセリ市の実態を知らない筆者など市の開催の仕方や入札、セリの模様が、セリ手（「振り手」）の技巧の描写を交えて、氣迫に満ちた会場の雰囲気ガリアルに描かれていて（七五―九一ページ）、読んで甚だ興味深く感じられた。はじめは会場の空気に圧倒されて氣おくれしていた氏がセリ市に声を出し始めたのはまず洋書からであった。当時は業者の学歴がせいぜい尋常小学校卒業程度の時代であり、洋書の標題すら満足に読めない人たちの多い中であって、大学出の氏はまさに「鶏群の一鶴」ぶりを発揮しえたわけである。

セリの初めての獲物は二点の原書の珍本であった。一点はフリードリッヒ・ヒルトの『支那文明の西方的起源』という本で、一円八〇銭で落したのが一〇倍の一八円で売れた。この本のことは若手の洋書通として知られていた同業の原広ひろし（現在の原書房社長）からきき知っていた。買手はこの本の鑑定人でもある原に決った。他にボーリング編纂のJ・ペンサム全集一冊本を一二円一〇銭で入手し、お茶の水の東京女高師へ三二円で納めることができた。こうした経験を積んで徐々に古本の勉強や古本相場に通じていくのであるが、万事、仕事熱心でまた仕事のコツを人一倍早くのみこむ氏はすっかり主人の信頼を得て店の金庫番を任されるほどになった。

関東大震災後、焼野原となった神保町界隈で、他の書店に先駆けて復興したのが一誠堂で、折からの古書ブームに乗って飛躍することができた。しかし、出版界、古書界全般は折からの昭和の大恐慌のあおりを食って深刻な打撃をうけはじめていた。加えて、氏が入店した昭和二年は、出版界の革命ともいうべき円本時代のはじまりで、有力な円本全集が大量に出回ってそれは、古本業界にとって死活問題となった。

不況の波をかぶる一誠堂の経営責任を託された氏は営業不振を挽回すべく真剣に対策を練った。そこで売り上げ増進の方策として、まず、「一誠堂は高い」という世評をぬぐい去るため

に、薄利多売の実行とサービスの向上に努めた。もう一策は店頭販売から外交販売へと外売りを伸ばす方針の確立であった。すでに一誠堂の常顧客として、震災後の古書ブーム時代の名残り、市内の官庁や各大学、図書館の中の相当数が納入先リストに上っていたし、また個人の有力な客としては、細川侯爵、住友家、大橋家など名家の名前があった。東大や上野の国立図書館などへの外売努力は失敗に帰したが、週に一、二回、倦まず弛まず率先垂範して続けられた氏の外売努力は、自然と他の店員たちの刺激剤になり、各人がそれぞれの受持の領域で売込み活動を活発におこなうようになった。こうした辛苦が実って店の売上げは着々と伸長していった。

三 目録販売路線の確立

外交販売が更に大きく進展する契機になったのが、昭和三、四年以降における目録販売の開始である。そのきっかけをもたらしたのが一九二八（昭和三）年一月の御大典（天皇即位式）を記念した全国的な図書館の新設および拡充ブームである。

東京の京橋・神田・深川の公立図書館の建設をはじめ、全国各府県の大小の公立図書館の建設、高野山大学、竜谷大学、駒沢大学等の図書館の新築、金沢文庫の新館、青森県立図書館の竣工、そして天理図書館の偉容の完成などによって、先に日本

図書館協会が選定して、一誠堂書店が作成した納入価格入り「邦文参考書目録」は大きな偉力を發揮し全国から次々と大口の古書の注文が舞いこんだ。

ここで、天理図書館の充実に尽力した天理教二代目真柱中山正善（教祖中山ミキの曾孫）と反町氏との関係について言及しておく必要がある。氏は別に『定本天理図書館の善本稀書』でも四〇余年にわたる二人の長く親密なつきあいについて詳しく述べているように、中山正善は、著者の生涯を通じての最大の華客^{とくい}で一九二九（昭和四）年末から一九六七（昭和四二）年一月の逝去にいたるまで終生変わることのない「一種の友人関係の様な」付合が続いた。各種各様の稀観書の蒐集購入に努めた中山の学問好きは今では広く世間に知られているところであるが、「同気相求むる」仲というか、両者の呼吸はぴたりと一つにあって、二人は会えばいつも古本の話に打ち興じ、珍本探しに東京中の古本屋めぐりをしたという。著者が天理図書館に納入した商品は、当時、最高の価格を示していた美術雑誌『国華』をはじめ大量の人文科学関係の学術雑誌（バックナンバー）の殆どがあり、それらを中心に洋書ではマクス・ミュラーの『東方聖典叢書』五一冊、カント、ラスキン全集、スタインやマルクの西域関係の高価本、スウェン・ヘデインの中央アジア及び支那の調査報告書、歴大な数量のナポレオンのエジプ

ト調査報告書、大鳥文庫の洋稀書等があった。中山は図書館としての蒐集の方針を確立するとともに、実際に強力な指導の労をとった単なる館長というよりもいわば「超館長^{スーパージョウ}」ともいうべき人物であり、欲しい本は片端からそれこそ私財を投げうってでも買い入れて図書館に寄贈したという。

今日の充実した天理図書館の背景にはもちろん天理教団という大きなうしろだてに資金源があったことは否定できないが、しかし、何よりもこのように学問を愛好し理解した大蒐集家あってこそその賜といわざるを得ない。

さて一誠堂の積極的な外売活動は東京市内だけにとどまらず、日本全国に及び、更に、一九二九（昭和四）―三〇（昭和五）年ころには遠く台湾、朝鮮、旧満州、北支方面にまで販路が拡大されていた。大鳥男爵の蒐集した欧文稀観書（キリシタン関係文書）の台北大学（現、台湾大学）への売りこみ、新設された北京の清華大学や上海の上海自然科学研究所への古書や学術雑誌の納入など精力的に販売活動が推進された。こうした成果もあってか、一九二八（昭和三）―二九（昭和四）年ころには、一誠堂は世の不況にもかかわらず大きな躍進をとげ古書市場での最大手の買手の一つに成長していた。

そこで、氏は念願の目録刊行にふみきった。総合目録ではなくまず美術書の分類目録（「一誠堂美術図書館目録」一九二九年

九月刊)からはじめた。美術書からはじめたのは、一誠堂は当時、美術書の在庫等では東京随一であり、美術書は単価が高く、大きな美術書の売れ行きが順調ならば十分に目録製作費をペイして採算がとれるとの判断からであった。

昭和初期の美術古書の黄金時代という幸運もあって目録発行後、注文が続々と到来したという。成功に励まされて、「稀覯書・美術図書・叢書目録」や「歴史・地理書目録」、「国文学書目録」、「學術雑誌」、「哲学・宗教」、「欧文日本支那関係書目録」というように、分類目録を矢つきばやに発行していった。のちに、弘文荘を支える四本柱の一人になった上野精一との知己は「欧文日本支那関係書目録」が機縁で、そのころは非常に珍らしい大阪からの長距離電話で高額の注文をうけたことにはじまったのである。

四 あいつぐ和本大口の仕入れ―九条公爵家本他

営業活動が活発になるにつれて商品の仕入れを強化しなければならぬ。良い商品を安く大量に仕入れるには、古書市場に出かけたり、本を処分したい客から直接買入れたり、売主を求めて新聞の案内欄に買入広告を出したりする。ところで、著者はこうした面でもなかなかのアイデアマンであった。すなわち、東京朝日新聞の案内欄に未曾有の一段全部一二五行の大広告を

出して業界の常識破りをやってのけたのである。広告料は九五円で、それまでやってきた五行広告の一ヶ月分全部の広告費にほぼ近い金額を一日分の費用にあてた。しかも書名と買入価格を記入するという業界空前の冒険も試みたのである。この大胆な企てがうまく成功して仕入れが急増するのであるが、そうしたなかに、氏を取り扱った最初の和本の大口仕入れが含まれている。

明治時代の古美術商『コレクション・ハヤシ』で世界的に有名な林忠正(一八五二―一九〇六)遺品集の絵本・絵入本の大量仕入れがそれである。安藤広重の東海道絵貼交、葛飾北斎、歌川国貞他の錦絵摺物、松花堂画帖、松平定信編集古十種など、そして洋書では、一七九八年のナポレオンのエジプト遠征の際に行なった大調査報告書などが含まれており、入札用の目録に掲載された総点数は一三二口に上る冊数があった。東京図書倶楽部で開かれた入札会は景気が上々で、落札値はいずれもみな氏の仕入れ評価を大きく上まわった。当時、氏は未だ和本に関する知識は乏しく、錦絵に関しては皆目わからず「盲滅法の評価も若干」あったという。北尾政演の『古今狂歌袋』(天明七年刊)など、「たかが狂歌師の画像集」と侮って五円に値踏みしたのが一〇倍の五〇円にハネ上って評価された。また、殆ど評価の対象になかった広重の絵短冊が珍品扱いされて落札値が七

一円の高値で決ったときは全く飛び上らんばかりの驚きであったという。結局、落札値総計が五千数百円にのぼり、それは現在の市場価格に直すと五千万円を超える実に一誠堂始まって以来の最大の仕入れであった。

次いで第二回目の大口の仕入れが九条公爵家旧蔵本の購入である。五撰家の一つに数えられるこの名家所蔵本の購入の始末や入札会の意義については、本書一九一ページから二四六ページにかけて詳細に論じられている。とにかくそれは、氏の一誠堂時代に経験した最大の事件であり、古書業者としての一生を左右するほど決定的な影響を与えた出来事であった。さらにまた、氏一個の生涯だけでなく、日本の古典籍業界全体に投げかけた波紋も大きかった。以下にそのいきさつを簡単に紹介してみよう。

東京赤坂の九条家から処分の申し入れがあったのは一九二九（昭和四）年一月であった。九条家の書物は和本ばかりで、それも和歌及び古物語関係、公家日記等の写本、江戸時代の漢詩漢文の版本、経籍、史書、詩文の中国版等で二日かかって書名の書きとりと評価額を決めた。書籍の数量は総点数で五、六百口、古い本箱で六、七〇本が林立するほどの分量があり、トラックで引取った。もともと一誠堂は洋装本を主体とする本屋で和本の扱いは苦手であった。氏も「実力皆無」で勘だけが頼

りで評価したという。ここでも氏の小学生時代からの旺盛な読書経験がものを言ったという。

さて、九条家本にはどのような珍本が含まれていたのだろうか。

業者や華客に配られた入札会案内目録によると、後水尾天皇勅版（元和七年）の銅活字本『皇朝類苑』一五冊をはじめとして、要法寺版の『論語』、『新編古今事文類聚』慶長木活字二二卷八四冊、『五百家注音弁昌黎先生文集』慶長木活字一五冊、『諸儒箋解古文真宝』五山版 書入本 以下、『源氏物語』嵯峨本 慶長木活 二冊欠五二冊、『源氏物語』里村紹巴自筆 天正古写本 五四冊、『狭衣物語』横綴古写本 五冊、『古今著聞集』古写本 一〇冊、その他、伊勢、大和、源氏の本文、及び源氏弄花抄以下の古注釈の類、落窪、とりかへばや、たまも等の古物語の古写本類があった。なかでも、勅版の『皇朝類苑』は古書界に滅多に出ない大珍本で、入札の際にいくらに値踏みしたらいいか主人も含めて店の誰も皆目、見当がつかない。

一誠堂の大切な華客で主人が大の崇拜者である徳富蘇峰の紹介でやってきた大阪の高木利太（当時、大阪毎日新聞社の専務取締役）の求めで一誠堂が入札した価格は一二九六円であった。反町氏をはじめ店の若者にとってそれは「クラクラッとするほどの驚き」であったという。それもその筈、わずか数日前に九

条家に出した評価額がたったの二〇円であったのだから。とにかく国文学の古写本でこれだけの品物が出るのはきわめて異例のこと。はたして反響は迅速かつ強烈であった。

若き日の池田亀鑑（国文学）をはじめ、大津有一、倉野憲司、笹野堅等東大の国文学研究室の若手研究者、後の侍従長の入江相政、そして前述の高木利太、徳富蘇峰らが次々に一誠堂に連絡してきた。一月一〇日の下見会には、文行堂、琳琅閣、浅倉屋、文求堂の業者、そして当時の古典籍業界の王者村口半次郎、関西からは京都の佐佐木竹苞楼の主人、細川開益堂の主人らがつめかけた。いずれも東西を代表する古書肆の老舗ばかりである。佐佐木信綱も会場に姿を見せた。佐佐木は、当時、西の内藤湖南と並ぶ碩学で最大のコレクターとしても名高い人物。さて、注文も殺到し入札は激戦であった。なかでも『我が身にたどる姫君』と『恋路ゆかしき大将』は特別の人氣があった。この二つの古物語は天下の孤本として学界では殆ど存在が知られておらず、『恋路ゆかしき大将』（寛永寛文頃の写本）は今でも天下一品の稀観写本である。一誠堂は店の大切な華客の注文にこたえて、『皇朝類苑』、『官職便覧』、『源氏物語』嵯峨本・里村紹巴自筆本、『我が身にたどる姫君』、『恋路ゆかしき大将』等を落札した。ちなみに、成實堂文庫の蒐集で熱心な蘇峰のために右の『官職便覧』と『薩戒記』を入手納本したと

いう。総じてこのときの入札は爆発的な好景気であった。

さて、九条家本の入札会の意義であるが、それは古書業界と学界に対してエポック・メイキングな影響を与えたと氏は評価する。

そのことは単に入札会で取扱われた数量や出来高（金額）を意味するのではない。そうではなくして、市場に出た本の内容質の高さや特異性を指してそういえるのであった。そのころ、大正末年から昭和初期にかけてわが国は古典籍業界の黄金時代と称される時代で、一九二六（大正一五）年の名古屋の平出文庫の入札、一九二七（昭和二）年六月の大阪の渡辺霞亭の遺書の入札会、同年一〇月の市島春城の蔵書入札会、そして池田金太郎の蔵書売立といった大規模な入札会が続いた。いずれも出来高四万円を超える盛大なものであった。一誠堂はしかしこうした入札会では、自らが主催した林忠正遺書のケースを別にすれば、いずれも仕入額は大きくはなく、大小の臨時入札会で第一位はおろか一〇位以内に入ったこともなかった。その一誠堂が、九条家の入札会では一挙に五千円近い金額にのぼり、「俄かの大突出」ぶりを示したのである。その原因は、前述のような有力な注文主を得たこと、古本業者としての長年のあいだに培われた信用、知名度の高さといったいくつかの要因によるものであった。九条家本の人氣の高さを証明するのが古写本の落

札価格の異常ともいべき高さである。古典籍の時価に精通していた諸大家、たとえば池田亀鑑、松井簡治（国語学会の耆宿岩崎家の静嘉堂文庫がそっくり譲与されて松井文庫として保存されている大蒐集家）、高野辰之といったベテランが示した入札価格がいずれもみな「半狂乱的な人気」の前に威力を発揮できず、散々な結果に終わってしまった。おかげで一誠堂は思いもかけぬ大きな利益を得たという。

しかし、こうした幸運は単なる偶然の産物ではなく次に述べるような確固とした根拠に基づいていた。成功の原因はまず第一に九条家の名声にある。藤原兼実以来、約八〇〇年続いた宮廷名家で長い伝統の中に蓄積された古書秘籍の宝庫から一度に七、八〇箱もの大量の本が市場に出るという知らせが研究者や好事家の関心を惹かぬ筈がない。しかも、明治大正昭和初期を通じて未曾有の古写本の大量の出現である。第二に当時の国文学界の事情があげられる。すなわち、関東大震災で公私の図書館や個人蒐集家の所蔵する古典籍が焼失し、世間一般の古書蒐集熱が高まっていたこと、国文学界や国語学界において古典の原文調査、異本探求の機運が熟しつつあり、そのことがいきおい古写本の蒐集熱と結びついたのである。

万葉集や平家物語のテキスト・クリティックは明治以来精力的に続けられてきたが、その画期的な成果は、明治末年の山田

孝雄『平家物語考』や大正初年の橋本進吉『古本節用集の研究』の両書となってあらわれた。その後、一九二四（大正一三）年には佐佐木信綱・橋本進吉・武田祐吉らによる未曾有の厳密で詳細な『校本万葉集』が完成し、本文の校訂や研究が有能な若い学者たちの仕事の目標と考えられるようになった。

万葉集や古今集、源氏、竹取、伊勢物語の本文研究を志す研究者も多く、そのためにいきおい未発掘の良質でより年代の古い写本探しがはじまる。こうして新資料を求める機運がとくに国文学界を中心に高まっていたのである。一九二四（大正一三）年に東大で学術雑誌『国語と国文学』が、翌一九二五（大正一四）年には京大を中心に『国語国文の研究』が発刊されたことも機運の醸成に寄与した。さらにまた、一九二三（大正一二）年に前記の山田・橋本両博士を中心に古典保存会が発足し、「古典保存会叢書」の古写本複製事業を推進したり、一九二六（大正一五）年には新潮社の「日本文学講座」が継続して出版される。こうした中で、一九二八（昭和三）年に編輯がはじまり、一九二九（昭和四）、三〇（昭和五）年ころに事業進展の頂点に達した新潮社版「日本文学大辞典」は東大の藤村作の企画になる「世界的な事象・辞典」であり、その浩瀚さと充実した解説の内容において、「西欧諸国の学界にも魁けようとする壮大な理想」をもっていた。掲げられた編纂の理念に、日本文学

の高度の研究と並んで資料の発見にも「現時の頂点を集め掲げる」とあるところからも、この大辞典の刊行が斯学の向上にはたした意義の大きさが理解されよう。このような学界の空前の研究熱が九条家本歓迎の素地を作っており、入札にあたって、一誠堂に二〇〇点を超す諸家の注文となって現われたのである。そして他の信用ある古書業者に対しても同様に多数の注文をもたらし、その結果、前にみたような異常な高値を呼び起したと著者は語っている。

一般に学問の進歩が良書の価格をつりあげるとは珍らしくないが、九条家本の市場への出現が皮切りとなって、それ以後、年をおって古写本の値が上昇しつづけた。その意味で九条家本入札会は古書価の革命をもたらしたのであった。しかも、古書業界の商品の主力がそれまでの江戸時代の版本から古写本へと傾斜してゆくのも九条家の入札が契機となっている。かくして、氏は九条家本の処理によって、古写本に対する強い需要が、単なる「気分や趣味に根ざしたものでなく、必要に基づく実需」であることを身を以て学んだ。貴重なこの経験は、氏が一誠堂を離れて独立してからのおちの進路を決定することにもなったのであった。

本書はこのあと、一九三〇（昭和五）年四月末の正親町家の蔵書の仕入れ、長野県川中島の素封家の珍本の買入れ、新潟県

新津市の大地主桂家の書庫二つの大量仕入れ、一九三一（昭和六）年五月の田健治郎男爵の蔵書の買入れ等、順調な仕事ぶりが叙述されている。また、千葉（鉦蔵）文庫擁書楼の入札会で扱った西鶴本が「風俗懷乱」の嫌疑で警察の取締りをうけ売買が全部帳消しになった業界始まって以来の珍事も語られている。

五 雑誌『玉屑』の創刊と目録作り

一誠堂時代の特記すべき他の事柄は、店員の古版本並びに書誌学の勉強を兼ねた雑誌『玉屑』の創刊（一九三〇年一月）であろう。それは、神田の古書店の若主人たちの集まりが生み出した『書物春秋』（一九三〇年一〇月創刊）に刺激されて発刊された。九条家本の入札が行われたあと、店内に和本や古典籍の勉強会を設けて、時々入庫する古活字版や元禄前後の絵入り古版本の端本を実費で買いうけて氏が執筆する解説（プリント刷）をつけ、会員の間で回覧していた。その会（玉屑会）を母胎として誕生したのが雑誌『玉屑』（年四回刊行）である。費用は会費制で不足分は反町氏が負担し、印刷は店に出入りの小物印刷所に依頼した。しかし、店の仕事が第一であるから、雑誌編集業務は昼間は一切禁止で閉店後、夜間の事務が全部終了してからおこなうことに決めた。玉屑会のメンバーは、氏を除けばみな二〇歳前の青年たちで学歴は殆どが小学校卒。他に

商業学校卒業が二人、中学中退が一、二名いる程度で生まれてこの方、原稿用紙に向ったことのない人ばかりである。しかしかれら若者たちの意気込みは唯ならぬものがあつた。出来上つた雑誌は本文六一ページ、印刷部数は一〇〇部、非売品でとてもいい先や同業の先輩、友人たちに配布することにした。また、販売目録は一切付けずいわば商売気拔きの勉強本位の雑誌であつた。全部で六冊刊行され、終刊号は氏の一誠堂退社後の一九三三（昭和八）年一二月に出た。掲載された文章は全部で六一篇、そのうち五九篇は氏を含む若い店員が店の勤務を終えた後に寸暇を惜しんでせっせと執筆したものである。

著者は、「どれもみな幼稚なものながら研究的な題目であるだけでなく、記述の態度も、文の内容も真摯で浮わつたものは一つもありません。よくもこれだけ持続したものと顧みて驚きを禁じ得ません」と当時を回顧して語っている。「発刊のころ」とば、「終日の激務を了えて、就寝前の三十分乃至一時間間を費やして調べ、究め、書いた之れ等の文章は、私達の生命の叫びです」とあり、現在の八木書店会長の八木敏夫や小宮山書店社長の小宮山慶一らが会員であり、古書業界の未来を背負つて立たんとするかれらの「真剣で純な愛書心」、「燃ゆる様な研究心と若々しい向上心」が直に伝わってくる。

この時期に氏が手がけたもう一つの大きな仕事は目録作りで

ある。平均して一ヶ月おきに発刊された目録は、そのすべてが分類目録で、美術書、歴史地理、国語国文学、哲学宗教、地誌郷土史料、動植物農学書、学術雑誌、欧文日本支那関係書目、美術図書目録といった種類のものであり、そして変り種が英文の「日本名著百種」The Best Hundred Japanese Booksであつた。それは日本国内だけでなく、新しく欧米諸国へ販路を拡大しようとして一九三〇（昭和五）年四月に企画し発行された。その販売目録には、『国華』、『東洋美術大観』等の美術書、『古事類苑』等の辞書類、『国史大系』、『大日本史料』等の国史、国文学、漢学、支那学、宗教、学術雑誌等が採録された。この英文目録は業界のパイオニア的な役割を果たしたものの労甚だ多くして報われることの少ない企てであつたと氏は述べている。

さて、一誠堂の営業成績は一九二七（昭和二）年に氏が入店して以来、世間のデフレ下の大不況をしりめに順風満帆で向上の一途をたどつた。店員数は入社時の八、九人から二四人に増え、あきないも従来の店頭販売から目録販売に切り換えて日本全国に販売網を拡大しやがて朝鮮や中国へも手を延ばした。そして古本市場では最大手の買手に成長し、一九三〇（昭和五）年の店の営業成績は、ついに氏の在社期間中のピークに達した（一九二六年比四―五倍の好成績）。

このような好景氣の原因を著者は謙虚に一誠堂主人や夫人の努力、さらに若い店員たちの一致協力の賜と述べているが、これまでみてきたような「一番番頭」反町氏の学識と才覚、仕事への誠実な精勵を無視して店の成功を考えることは到底不可能であろう。さらに好況の余勢を駆って関東大震災で焼失した社屋の再建を図る。すなわち、古書專業者としては全国唯一の地上四階地下一階のビルの偉容が一九三一（昭和六）年の一〇月に完成したのである。新築落成記念に店舗の披露と嵯峨本の展覽会を企画し、披露会では徳富蘇峰の祝辞と講演がおこなわれた。展覽会に出品された嵯峨本は全部で八七種。安田（善次郎）文庫からの出品が一番多く、次いで蘇峰、第三位が高木利太所蔵本の出品であった。閉幕にあたって、著名な書誌学者和田万吉博士、三村清三郎らの大家と当時まだ新進氣鋭の長沢規矩也、川瀬一馬らが集まって嵯峨本に関する座談会が開かれ、翌年には川瀬の大冊『嵯峨本図考』を「一誠堂新築落成記念出版」と銘うって二五〇部を限定出版した。またこの座談会が機縁となつて日本書誌学会が誕生したという。

六 一身上の転機—弘文荘の創業

一誠堂勤務時代に著者は岩波書店と研究社の二社からスカウトされかかった。岩波茂雄から直接話があったのは一九二九

（昭和四）年春のことで、岩波が経営する小売店勤務の誘いである。もし出版部で働くことを求められたのなら、もともと出版志望の氣持が強かった氏は話に飛びついたであろうと語っている。次に半年程たって、研究社の社長小酒井五一郎から研究社に来て働く氣はないかと直談判があった。当時、研究社は岩波と並ぶ新興の大出版社であった。岡倉由三郎の『英和大辞典』で成功し、「英文学叢書」や『英語研究』その他の雑誌も好評であった。小酒井家の一族に加えてもよいという破格の待遇の申出にもかかわらず、結局辞退する。世俗的にいえば、二つの有力な出版社からの話はたしかに「出世の糸口」であったが、氏は習い覚えた「古書の面白味に心が惹かれて絶縁」でできなかったのである。否それにも増して一誠堂主人夫婦の愛情こまやかな暖かい配慮と家族的待遇、そして氏の才能に対する厚い信頼、同僚たちとの親愛の絆によって育まれた居心地のよさが勧誘に応じさせなかった「奥深い理由」であったと回想している。

店では実力ある「一番番頭」として、主人の「恩遇」を受け、何不自由ない毎日を送っていた氏が、身の独立を促す母親の強い勧奨にあつて、数え年三〇歳を迎えてついに意を決して、思ひ出多い五年半の一誠堂を退社することになった。一九三二（昭和七）年九月のことである。送別会の席上、主人の酒井宇

吉は、「私は開業以来、今日まで三〇年間に、沢山の店員を使つたが、反町ほどよく働いてくれた者は一人もなかった。又これからも、恐らく出ないだろうと思う」と述べた。それは著者にとって最高に名誉あるはなむけの言葉であり、この日の光榮を生涯忘れることができないと語っている。

さて、いよいよ独立の日々がはじまるのであるが、それまで盆正月もなしに一年中殆ど無休で働き続けて得た給料は、住込み店員でしかも酒・煙草ものまず外食もしない質素な生活を送っていたのでこれといった大きな使途もなく自然にまとまった蓄えとなつて残っていた。やめたときの貯金は合計で五六〇〇円あったという。それに長兄から営業資金として手渡された一〇、〇〇〇円を資本にして営業のめどを立てた。

反町氏は無店舗で目錄販売方式による有力客筋との直接取引をおこなう方針をとり続けていることは早くからよく知られているところであるが、それは、古本屋の「小僧からたたき上げた、百戦練磨の旦那方」との市場での大声を張りあげてのセリの競争や店頭サービスの競争では到底勝負はないとみて、学問的知識を生かして、格別に専門的な珍本・稀覯書の分野で勝負しようとしたことに基づいている。こうして東大の正門前に小さな二階家を借りうけて、弘文荘の看板を掲げたのが一九三二（昭和七）年九月一五日のことであつた。

氏にとって最大の資産は有力な客筋であるが、氏は「小さな弘文荘の四本柱」として、第一に天理教の中山正善、第二に二代目安田善次郎、第三に東大の池田亀鑑、第四に大阪朝日新聞の上野精一の四人の名を挙げている。この四人はすべて、一誠堂時代に開拓した上得意客であつた。こうした錚々たる古典籍コレクターとの接触から物心両面で大きな支えを得た様子が、くわしいエピソードを交えながら叙述されている（三二〇—三三三ページ）。一読してまず感じることは、何といつてもやはり著者の人並みはずれた仕事への熱意と誠実な態度であろう。源氏物語研究の権威池田亀鑑博士の「崇高」とも称すべき原文研究への情熱に打たれていた氏は、ある日、一誠堂の店頭に立寄つた池田が、親が池田の研究のために郷里の田畑を処分して資料蒐集の費用にあててくれることをうれしそうに語つた姿に強い感動を覚えて、「このお方のために働かねばならぬ。よい古写本を捜索しよう」と決意したという。

さらに、古写本の見方について池田博士から専門的な説明をうけた様子が書かれているが、たとえば、源氏物語の河内本と流布本のちがいの見分け方について、紅葉賀の巻末近くの個所の一節をとりだして、「伝授」をうける条など、それは本屋の商売のための修業というよりもむしろ大学のゼミナールを思わせる雰囲気伝わってくる。このような氏の純粹で学究的な姿

勢が専門研究者のあいだに大きな信頼を博することになったのである。まさに、唯の本屋の主にはみられない「異常」ともいえる古書への執着ぶりである。こういう一節を読むと、一国の学術文化の基礎的發展に、著者のような良心的な古書業者がいかに大きな役割を果たすものであるかということを改めて考えさせられる。

独立早々の氏が手がけた最初の大きな仕事は、日本中世芸能史の研究者笹野堅の依頼に基づく観世流家元の観世左近大夫慕閑という名人が元和六年の卯月に刊行した謡曲本の発掘であった。客から頼まれてわずか二週間めに京都の内田美術書肆に立寄ったところ、全く偶然に、店の主人からこの大稀観本を紹介された。一五〇〇円の高値本である。早速、一割の手数料を加えて一六五〇円で笹野教授に紹介する。ところが値引きを要求された氏は、元和卯月本の価値からみて内田主人が譲歩しそうにないとみるやいさぎよく京都への交通費として五〇円だけ請求して結局一五五〇円で品物を処分した。話の一部始終を聞いた内田美術書肆は、一五〇〇円の値段に含まれている内田書肆の手数料一割の取り分をすべて開業祝いに著者に進呈すると申し出た。おかげで、合わせて二〇〇円の利益を得ることができた。昭和七年ころの一五〇〇円の古書価は今の七、八〇〇万円ないしそれ以上の高額の取引きになるといふ。この一件は多分

に僥倖の性格が濃いいえるが、しかし、ここでもやはり、大切な「千円級の顧客」のために何としても大物の商をこなしたい、また、こなす自信をつけたいという一途な意気込みとそのためには少々の目先の利益など頓着しないといういわば士魂商才とでもいふべき姿勢に成功の秘密があるように思われる。成功といえばもう一つ、一九三三（昭和八）年一月末に京都の入札会で学界未知の新資料「十四経発揮」（慶長元年刊行の鍼灸書）を発見し、安田善次郎に納品したことがあげられる。これは氏にとって、新資料発見の第一号であった。

七 「弘文荘待賈古書目」の創刊

古書の蒐集と販売業務に加えて、古書目録の作成は著者が生涯をかけた仕事といえる。現在、「弘文荘待賈古書目」と題する目録は五〇冊発行されており、それぞれの掲載品目に詳細な解説がつけられている。氏はロンドンのニューボンド・ストリートにあるマグス・ブラザーズ書店の目録をモデルに目録の刊行を試みた。外交官大島富士太郎に教えられたスペインのマドリッドにあるヴィンデル書店の実物を見て目録に開眼したという。さらに、大島に依頼して入手したマグス・ブラザーズ刊行の二冊の販売目録、京大の沢村専太郎旧蔵書の中にあつた一九二八年版のマグス書店の「五百号記念目録」の大冊、他にパリ

のギュートネルやイギリスのB・クォーリツチ、J・ピアソン、W・H・ロビンソンらの堂々たる目録に接するうちに次第に本格的な目録作りの意欲が湧いてきた。とくに、マグスの「五百号記念目録」は世界第一の古書目録ともいえる豪華本で総ページ三五七、掲載点数二二四点、一点ごとに大型二色刷の図版が入っている。そして大部分が古写本や一五世紀の古版本、初版本、名家自筆草稿、書簡等から成っており、それらの多くが最高一万ポンドから数千ポンドの高額本であった。そのうえ、一点ごとにつけられている詳細な解説が、学術資料としても十分役立つ高度の内容を備えており、著者は畏敬の念を抱いたという。

氏が「弘文荘待賣古書目」第一号を出したのは一九三三（昭和八）年六月であった。命名の由来は、尊敬する江戸時代の珍本商達摩屋五一の屋号待賣堂から採った。買は買うの意で買人を待つという意味がこめられている。第一号の目録は四月初めころから編纂にとりかかった。昼夜兼行で調査と原稿の執筆が続けられた。目録に掲載された書目には次のような本があった。播州竜野の元領主で賤ヶ岳七本槍の勇士の一人脇坂甚内安治の直系の子孫である脇坂安之から仕入れた八雲軒本『古事記』や『先代旧事本紀』を中心に、同業者から買い入れた伝藤原為家筆『古今和歌集』、伝尊道法親王筆『古今集』序一卷、宗祇『老

集集』の足利時代の古写本等、それに、富樫広蔭（紀州の国学者）の自筆稿本類、易林本『節用集』、古活字版の『沙石集』と『礼記』、『伊勢物語』絵巻奈良絵本、嵯峨本謡曲本、江戸時代の版本では、天下一品『吉原しつゝい（失墜）』、延宝二年版行の絵入吉原本等、それに在庫の商品が収載された。点数は本目録九三点、添付の一枚刷の拾遺四点、合計九七点あった。一点ごとに解説一ページと写真版一ページを付けた。八雲軒の『古事記』、『先代旧事本紀』、伝藤原為家の『古今和歌集』、『富樫広蔭叢書』の四点は解説・写真ともに二ページずつ付けられた。印刷部数は七五〇部で関係各方面に配られた。この第一号の目録は本の体裁のみならず、内容が次の点で他の古書目録とくらべて異例のものであった。すなわち、日本の古書販売目録はその殆ど全部が印刷本が中心（和本については掲載品の八〇パーセントないし九〇パーセントが江戸時代の木版本）で写本や古写本は非常に少ないのに比して、弘文荘の目録は江戸期の版本は全体のわずか八パーセント強、反対に古写本・写本は四七パーセントと約半数を占めている。また、一点の平均単価は、八雲軒本『古事記』の一二〇〇円をはじめ、総じて高価なのが特徴で、他の和本目録の掲載品は最低は八〇銭から一円、高額のもので二、三〇円であったのが、弘文荘のものでは平均単価が一一一円というのは常識外れの高値であったという。目録の反

響はすこぶる良好で、目録発送後わずか四、五日で八〇パーセント強の売上げを達成した。しかも総数九七点のうち、一〇〇円以上の高値本が二七点あり、そのうち二四点が売切れ、重複注文は数え切れぬほどあった。売上金の合計は一一、五〇〇余円になり、予想外的好成绩を収めた。注文も常連客が多く、上野精一（八雲軒『古事記』をはじめ伝為家筆本『古今和歌集』を含む大口の注文）、佐佐木信綱、池田亀鑑、倉野憲司、大島雅太郎（三井の常務理事）、安田善次郎、武田祐吉、宮内省図書寮、南大曹（南胃腸病院院長）、七海兵吉（三井鉱山専務取締役）、中山正善、森村義行（松方正義の子息。森村市左衛門の養子。森村組、森村銀行頭取）、山田孝雄、平泉澄、笹川臨風等々、日本全国の学界、財界の大物がズラリと注文者名簿に顔を並べている。

氏はこの好成绩は古写本重視の波に乗ったおかげとあくまでも控目である。さらに、謙虚な態度といえ、目録の記事にあったミスの発見と訂正にいたる経緯の説明も率直で読んで気持ちがいい。整版の易林本『節用集』を四周の界線が活字であることから古活字版易林本の新発見と銘うって目録に掲載したところ、狩野亨吉から直接、誤りの指摘をうけた。そこで直ちに第二号に、狩野博士や川瀬一馬から叱正をうけたことを付記しおわびと訂正記事を発表した。早速、買主の安田善次郎に会って

五〇〇円を二〇〇円に変更して納品することを認めてもらった。実は目録の件でもう一点悩みの種があった。それは、八雲軒本『古事記』を脇坂安之から三〇〇〇円の値段で買入れたのに、一二〇〇円の高値で商売していることである。目録がもし脇坂の眼にとまったら、暴利をむさぼる悪商人と非難されるにちがいない。そこで、目録を送るべきか否か、あたかも「ハムレットの如く」迷ったあげく、ついに意を決して一部を発送した。

もともと弘文荘が阪神方面に送る目録はごく僅かで姫路市内へは一冊も送っておらず、したがって姫路のさらに奥の片田舎に住む古典籍に関心のうすい脇坂が弘文荘の目録を見る機会など滅多に考えられない。それなのにわざわざ目録を送るのは、「寝ている児を起こす」結果になるだけではないかとの思いも走ったが、結局、ほおかぶりは卑怯だという気持ちに押し切られた。つまり、三〇〇円で買った品物を一二〇〇円に評価するにはそれ相当の理由があること、もし異議を唱えられたら「千二百円はわが手柄」と堂々と申し開きをするつもりであった。申し開きの理由はこうである。『古事記』の古写本が特別稀少であることは、当時、業者の誰もが知らなかったこと、宮内省図書寮や水戸の彰考館、帝国図書館や蘇峰の成實堂文庫、静嘉堂等、全国の有名な図書館、文庫、その他の目録、文学辞典類、東西一流の古書肆の目録等、丹念に調査考証した結果ようやく

稀観書であることがわかった。また、八雲軒脇坂安元についても史書文献にあたった。それでも申し開きがきき入れられない場合には「値幅の半ばをお贈り申して、おわびしよう」と決心した。目録を送ってから何の音沙汰もなく無事に一年が過ぎ去ったある日、著者の自宅に、突然、脇坂の殿様が、古い和歌集の古写本を風呂敷に包んで、いつもと変らぬ温顔を見せたという。「殿様」のおおらかさと著者の安堵が入りまじった感動的な情景で本書は終わっている。

著者は「弘文莊待賈古書目」第一号の「挨拶」で、勤勉・堅実・真面目を不断のモットーとして掲げている。また、「『売らんかな』主義一天張の出駄羅目やはなはだしい誇張」を排し、古書の価格はあくまでも公正で「合理的な値段付」けに徹したいとも語っている。このようにして顧客に十分信頼される良心的な古書肆を目指すこと、それこそ生涯を通じて変らない氏の初心であり、「平常の行動律」なのであった。

本書を通読して感ずる魅力の第一は、何といっても、著者が自ら選んだ「稀観書、珍籍専門の特殊書肆」を天職と信じて、今日まで、道一筋に歩んできたそのひたむきな精神の美しさにある。利潤を得るためには、信義や誠実さを無視してはばからない風潮が支配する現代日本にあって、氏の商法はたしかに、

いささか古風な趣きを呈することは否めない。しかし、氏は一誠堂勤務のころから独立営業の時代にかけて、営業成績において数々のめざましい成功を収めたことも事実であり、その非凡な商才は驚嘆に値しよう。氏の志の高さが、合理的な事業の経営と巧みに結合された、いわば現代版士魂商才とても形容すべき態度が不思議な感動を読者に与えずにはおかない。

あえて、筆者が拙い紹介の労をとったのもひとえにこうした感動が動機になっている。予告によれば、さらにこのあと引き続いて三巻の出版が予定されている。完成すると文字通り昭和の古典籍移動史の全容が浮彫りされることになる。同時にまた、昭和のこの稀にみるすぐれた古書業者が、古書籍の動きを通してみた過去六〇年の日本の激動の歩みと時代精神の変遷がつぶさに語り明かされることであろう。

今年八四歳で未だ矍鑠^{かくしゃく}として第一線で活躍中の著者は、現在、「書きつつ転ぶところまで」の心境で執筆を続けておられる。氏の健康を祈念して全巻の一日も早い完成を鶴首する思いにかられるのは筆者一人ではあるまい。（一九八六年七月一四日）

反町茂雄著『一古書肆の思い出Ⅰ 修業時代』（平凡社刊、一九八六年一月初版）